アイヌ民族の衣生活について（第三報）

荒　井　純　子　　藤原智恵子

序　　言

紀要第三集に於て，アイヌ民族が着用していた衣服の材料繊維とその採取法について記した。彼等の衣服は自製材料よりなるものが旧来のものであり，動物質の毛皮類と共に，彼等特有の植物質の草衣（kera）厚司（attushi）として着用されていたことは前にも記したが，今回は彼等独特の直感と技術によって採取された植物質の各種繊維を如何なる方法で織物にしたか，その織機の由来及び各部品について記したいと思う。

調査の方法は前回同様次の四つの方法で調査したが，今回記述の各部品は1957年筆者達が現地調査の際，平取町二風谷部落（cotan）及び北大児玉作左エ門教授（現北大名誉教授）宅にて，技術操作を修得した際使用したものを主として記すこととする。

一，アイヌに関する学識者に御意見を伺う

二，古文献による調査

三，現在ある土俗品中より衣類を調査

四，現存する古老（北海道内）を訪ねて往事の事情を聴取（1957年，1959年，1961年夫々8月調査）

本　　論

厚司について

彼等特有の厚司はいつの時代のものであるか，そしてどの様に使用されていたか調査したいと思っても，着古された上に副葬品としてすでに失はれ，更に海外に流出しているものが多く，たとへ残っていたとしても放置されるままに折れたり，汚れたりしているので容易に調査が出来ない。

この楡即ち「おひよう」の樹皮から作られた布地は粗らく，こわく，特に乾燥している時は大へんいたみやすいが，湿っている時は丈夫であるとのことで，彼等の夏服としてよく使用されていた。中でも「アカダモ厚司」は湿れると目がつんで防水の役目を充分はたすということである。厚く織られた丈夫な衣服は，古く内地でも関西地方で北海道通いの廻船問屋の人達に仕事着として用いられていた様である。（杉山寿栄男著　日本原始繊維工芸史による）その形は大体奥羽地方の農漁村で着用していた「もじり筒袖」の形式で，アイヌ固有の服装として，永く北海道南部の地方に普及されていたようである。

一方アイヌ自身でも，樹皮又は草等の集合繊維で織られた手強い織物より，内地の木綿の古着の方が着心地もよく，手数もかからないのでこれに彼等特有の切伏紋様や刺繍紋様を施し，晴着として着用した。厚司は作業衣として着用されたとも或は又唯一の礼服として用いていたとも文献に見

図1　厚司を着て「イナウ」を作る男
(1961年旭川にて写す)

られるが，現地調査によって諸説を立証することが出来た。こうしたことは，樹皮の容易に採取出来る地方と，古着類の入手し易い地方とがある様に，生活様式により，住う地方により幾らかの違いがある事は当然のことと思われる。狩猟によって得た動物の皮が充分な衣服として役立っていた昔の時代では，これ等樹皮繊維による厚司は貴重な衣服であり，前報にも記したように，狩猟が得意で沢山の毛皮を持っている人は，それ等の皮とこの厚司を物々交換によって得ていた。ある文献に婦女は厚司を織り，男子は彫刻，狩猟をすることを仕事とし，婦女の厚司織及び刺繍は女子を評価する尺度となったことが記されていたが，私共に裁縫の得意なもの，不得意なもの，好む者，好まない者があると同様に，この民族でも好まない者，作れない者，女手がなかったり，又よき指導者がない場合は，それが女子の仕事であるにせよ仕方なく物々交換により厚司を得て着用した様である。コタンで刺繍の一番上手な者が酋長の嫁になったことを前にも記したが，こうした上層階級にはその素質と良き指導者があったわけなのである。

前報で記した採取法により薄く剝れた樹皮は「年とった婦人」により巾せまい紐状にさかれ，丁寧に結ばれ約一ポンド位の重さのものに巻きあげられる。(Ling Loth 著 Studies in Primitive looms による）調査の際ある老女は直径約20*cm*位の玉2個あれば経糸が足りると手かっこうで教えてくれた。

図2は蝦夷マンガの一部であるが，蝦夷生計図説「アツシカルの部」にもこの絵を見ることが出来た。即ち左図は「アツカプ，アツヲン」と称し（山中で立木より樹皮を剝ぐ図であり）右図は「アフンカル」（糸を作るということ）で出来た糸は，丸くまるめられ，次に織機にかけられるのである。剝がされた樹皮を細く裂くことは中々熟練を要することで，厚司のよし悪しはこの糸作りに多分の影響がある様で「年とった婦人」とは「よくなれた人」という意味と思うが専門家でも年寄りという意味でもない。私共が糸を裂いてみても細くそして同じ様な太さに長く続けることは中々容易でなかった。あまり結び目が多くなると織機にかけてもきれやすく，織物の表に出ても邪魔になるわけである。

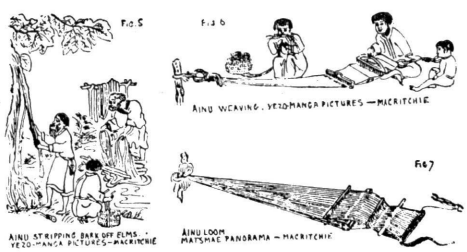

図2　厚司の製作行程（Ling Loth著より）

織機の由来

この様な特殊な方法で作られた糸は，南北のアイヌとも同一形式の織機（アツシカラペ attush-karpe）により夏織られる。織られた布は裁断して縫い合せ，冬ごもりの間に刺繍がほどこされるのである。**図2**右　　現在コタン（部落）ではこの経糸を家の中で次の部屋まで長くのばし，窓ぎわに釘づけにして織っているが，昔は二三の婦人が朝自分達の織物を他の大きな家に持ちこんで，鉤を固定させて終日織っている。(Ling Loth 著 Studies in primitive loomsによる）共同で織っていた様にも思えるがその操作に苦労のあったことが知れる。この技術は内地と関係の深い南方アイヌに発達していた様で，現在でも日高地方では工芸品用の織り物作りとして操作されているよう

であり，北方では行われていない。これよりしてもこの織機は内地の原始織機の居座機と同一のものであろうと思われるが，名称，音等は似ているがその動作の点で内地のものは中国及び朝鮮形式であるといわれ，アイヌのものは織糸の先端が木材に結ばれて織りながら材元へ蹙りつつ織られるもので，構成を異にしているようである。しかし厚司織といい，この織機と云い内地と密接な関係のある南方アイヌに現在でも残って居ることは不思議なことで，John Batchelor 氏は古い内地の織機の形式が彼等に残されたものであるかもしれないと云っている。又フランス人 Montandon 教授の説では「この織機はインドネシアのものであり，彼等が日本文化にもたらした以前にアイヌ文化にその影響を与へ，使用されていたものであろうことは疑う余地がない。そして彼はすべての織機は次の四つの大きな行程を径て発達してきていると云っている。彼の説によれば

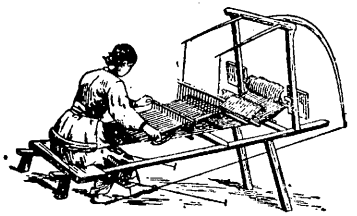

図3　朝鮮古代の織機

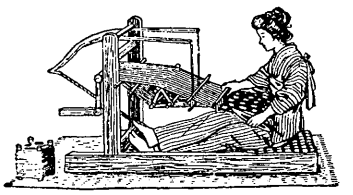

図4　わが国の居座機

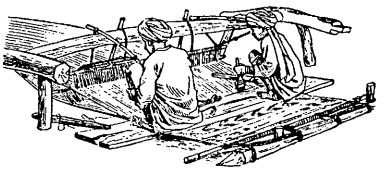

図5　インドの織機

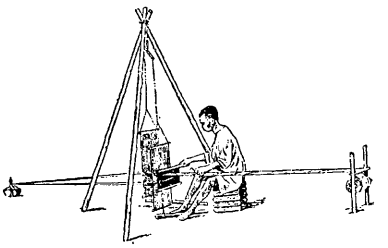

図6　南アフリカ原住民の織機
（図3,4.5.6. 被服辞典より）

A　織り編み
B　手のみを用いる織機
C　ペタル装置のある織機
D　索引装置つき織機

でありこれ等の点から考へると，アイヌの織機はB段階に属しているもので，Dは支那文化（中国と日本）やヨーロッパのものであり，Cは支那からモロッコへかけて中東のスーダンを通って各地に飛び地を作りながら拡がっている。これに対して B の手だけを使う織機はインドネシア式とも呼ばれるべき織機であるが，それは各地（インドネシア，マダガスカル，東アフリカ，チベット，アイヌ，中央アメリカ）に飛散伝播しているが中心部はインドネシアである。アイヌ人が一番最初に織機として得たのがインドネシアのそれであり，日本文化から得た。 D の索引装置つき織機が適用される以前のことであったと云うことは疑う余地がない。(G Montandon 著 La Civlisation Ainou ot les cultures arctioues による）又 Dr Manro の手記によると自分は Sternberg 教授によって述べられたような，太平洋諸島のものと，何か特別な共通点を持っていると云うことは理解出来ない。すべての織機がその基本的特徴に於て，そのアングル（angles）が互に同じようなものでなければならないほど，内側にかかっている糸に対して機械的な方法を持っていることを特筆する必要はない。他の文明からの借り物であろうとなかろうと，その相違は環境の中に溶けこんだ「持ち運びの出来る」と云うことで，決定的な第二番目の特徴であり，一般的な類似として近くに置こうと遠くに置こうと，移動することが出来ると云うことにある。私の意見としては特徴はアイヌとか，太平洋住民の織機にのみ限られているのではないと云うことである。太平洋諸島住民の織機は独特ではないように思われる。或特徴がアイヌとか，太平洋文明に対して特種であるということを示し得るものではなく，他の文明に影響されないし，一般的起源をさし示し得ない。その上オセアニアかユーラシアを通って来たのかはっきり

しない。このことは Sternberg 教授がアイヌの原型の立証として，これ等の島々から持って来た丸太のカヌーの場合に見られたに相違ない，丸太は紀元前のヨーロッパと近東に於て ship の語源 chip として見出される。(Dr Manro 手記　渡辺仁複写による）そして Manro 氏は医師である彼の医学的立場から「この頭蓋骨をもつ人種は非常に優秀な頭脳をもっているものであり，これ等からして彼等から新しいことを考え出し得ることは疑う余地がない」とまで云っている。

私共が知ることの出来る範囲での織機について考えて見ると，最も原始的なものは何の用具も用いないで，人手によって行われたものであり，この困難を軽くするために垂直織機が出来た。最も簡単なものは，地上に立てた二本の棒に一本の横木を結びつけたものであった。経糸の数が増してくるとその操作が困難となったので，そのもつれを防ぐために経糸に石や骨をおもりとしてつけた。緯糸を組み込みやすくするために，棒にまいたり，まるめたりする。緯糸を密着させるために，篦等の工夫もされた。綜絖棒等も工夫されたがこの垂直織機では長い布を織るのに不便であり，**図6**の様な水平機が考案された。しかしこれは経糸を長くはるので屋外で操作された。次に屋内でも出来る様に工夫されたのが中国の古代織機であり，これが朝鮮を経て日本に伝えられ，いわゆる居座機となったのである。明治中頃まで広く使われていた織機である。

厚司織の織機と居座機の織機の開口原理を図に書いて見ると，**図7**のようになる。居座機の中筒はアイヌの「カマカップ」に当り，ベルトは「ペカオニツ」に当る。ベルト及びペカオニツによって上下に分けられた経糸の間を，緯糸が通り，これを「ウオサ」と「アツシベラ」でしめるのであるが，織物の構想からゆけば何等ことなることがないわけであるが，居座機の「おさ」と同様な「おさ」をもちながら，これの目的は全く異っているのである。私共は内地の居座機は，ＡＢの位置が中筒のすぐ近くにあるが，アイヌのものはＡＢは，はるか遠方にあるわけで，ここで分けられた経糸を「ペカオニツ」つまり中筒までもってゆくには相当の距離があるわけで，この二本の糸を並べるという工程が必要であったために「ウオサ」をここへ持ち出したものであろうかと考える。ここに三つの意見を見出したが，何れにせよ他から何等かの交易によって入ってきたものに彼等独特の方法が加えられたのであろうことは充分考えられる。九州あたりとの交易もあったし，アイヌ民族が内地から北へ追いやられたものであるとすれば，海峡をへだてた青森辺りは居座形式であるのに，アイヌは変った形式を使用していると云う点に一考を要する面があると考えさせられる。又織機自体の変遷を考える時には，その文化等の発達状況等と合せればうなづける点も多々ある。その移入先きについては織機の歴史と共に更に研究の必要があると思う。

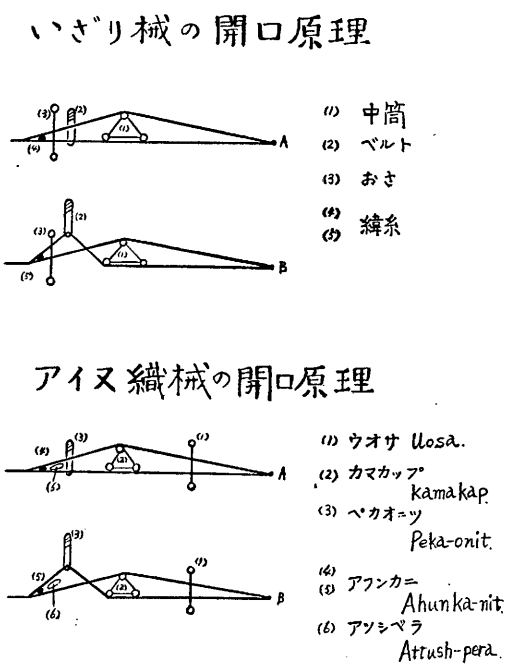

図7　織機の開口原理

織機の各部品について

厚司を織る機台を彼等は「アツシカルペ」attush-karpe と云い厚司を打ちつくるものということ

である。この織り出すことを「アツシシタイキ」attush-shitaiki 又は「イシタイキ」 ishitaiki といい，「シタイキ」とは叩きつけることで織機として重要な綜絖棒「ペカオニツ」と「カマカップ」により，上下に分けられた経糸の間に「アフンカニツ」ahun-kanit にまかれた緯糸が入れられ，緯糸を「アツシペラ」で叩きこみつつこれを交互に行うことによって厚司が織られるのである。

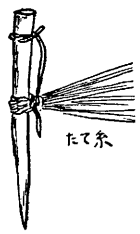

図8　ウアップ

A　ウアップ（(warp-peg)　杭　　**図8**

長い経糸のささえられるだけの杭が必要のわけで，これは土間又は屋外の土に打ちこまれる。元来彼等の織物は戸外でなされるのが常であった。

B　ウオサ（uosa）　　**図9，10**

経糸を真直ぐにするために使用する竹の櫛のようなもので，0.2〜0.3*cm*位の太さの竹ぐしが120本〜130本位きれいに板の間に並べられている。Manro氏の手記には「160 本の竹ぐしを…」と記されている。この竹ぐしの間に経糸が上下に分けて入れられるのである。**図9**の「ウオサ」は私共が実地操作の際使用したものである。

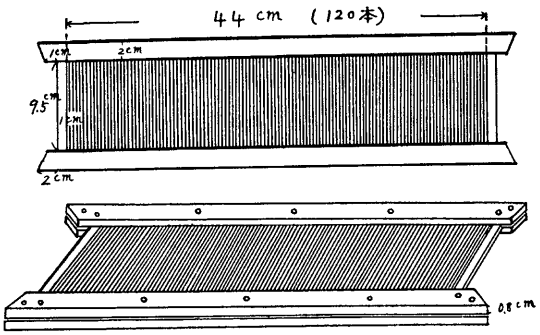

図9　ウ　オ　サ　（児玉作左衛門蔵より）

材質…「いたや」である。

昔は**図10**（**イ**）のように一枚の板に穴をあけ美しい彫刻がしてあった。上下の穴に経糸が通されるのである。(鹿野忠雄著より)

又（**ロ**）のように板に縦孔をあけたものを使用したことも，（**ハ**）のような上下の穴のものもあることが文献に記されているが，(Ling Loth著より）博物館，郷土館に所蔵されているものは竹製のものが多い。これは恐らく内地の者に教えられて竹を割って作ったものであろうが，その由来年代ははっきりしていない。内地の原始織機である居座機と彼等の織機との違いは根本的にこの「ウオサ」の位置による経糸の操作にあると思う。

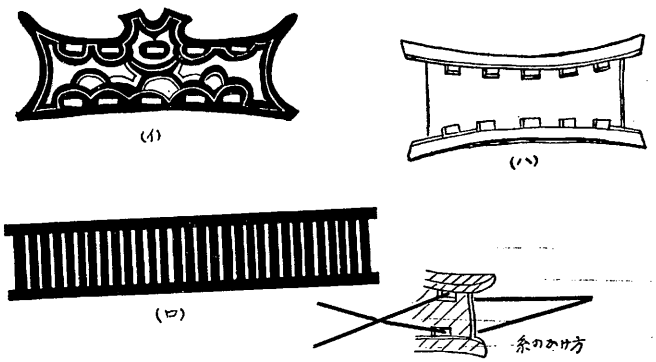

図10　ウ オ サ の い ろ い ろ　（鹿野忠雄著より）

C　カマカップ(kama kap) **図11**

糸をひらくものと云う意味である。この台木の上と下に経糸がわけられて，上下の経糸の間を保たせるものであり，これにもいろいろの形があって，年代地域によっても様々な変化がある。　材質…「さびた」「いたや」「かつら」である。

現在見られるのは多くこの形のものであるが，**図11**(**イ**)は円形の板でその端を合せている三本の円筒棒からなっている。(**ロ**)は植物の太い茎を切り，裂けないように巾広い繊維で両端が結んである。(**ハ**)は小形のベンチ形をしたものであるが，古い時代のもの，しかも永いこと使用

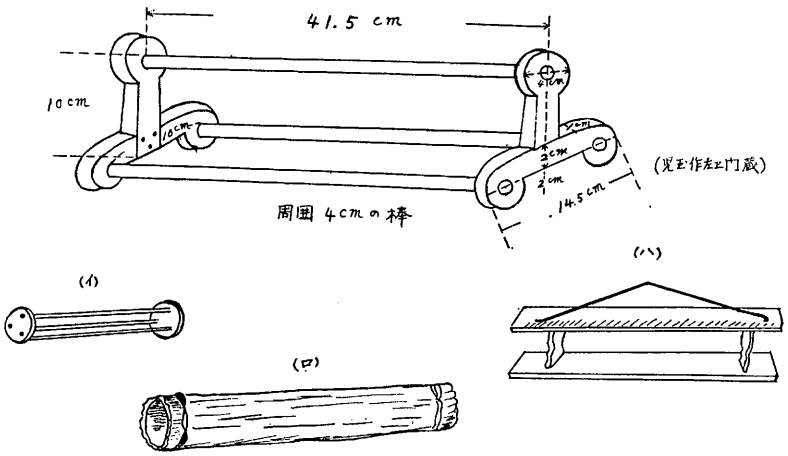

図11　カ　マ　カ　ッ　プ　(Ling Loth 著より)

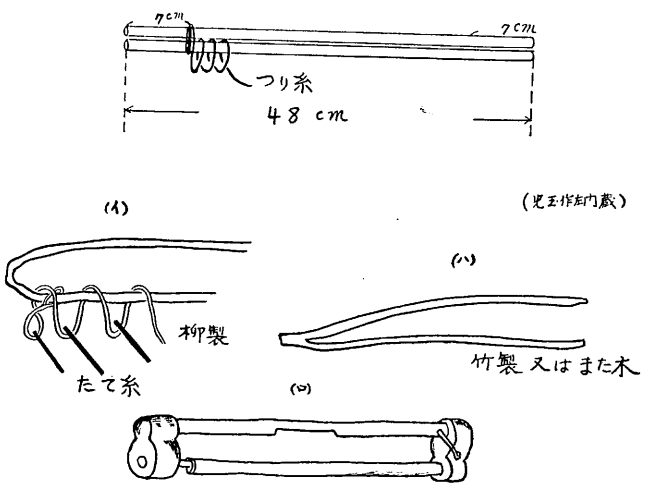

図12　ペ　カ　ウ　ン　ニ　(Ling Loth 著より)

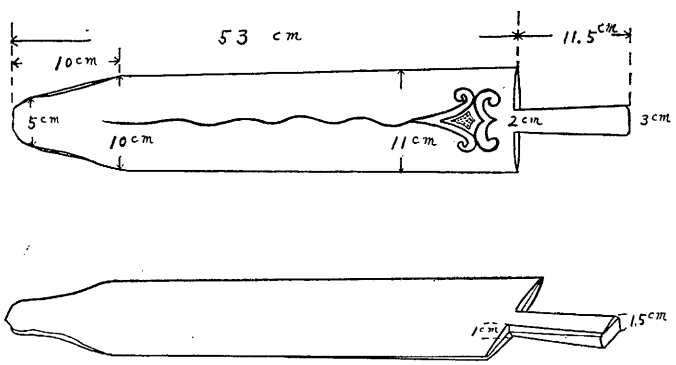

図13　ア　ッ　シ　ペ　ラ　(児玉作左衛門蔵)

したものは山に，経糸によるきずがついているものさえ見られる。

D　ペカウンニ (pekaonit)　**図12**

ペカオニツとも云う　織物の上にのるので「ペカ」という。カマカップによって分けられた経糸の低い方の糸を，つり糸によりもちあげるのに使用される。これによって下糸が上にあげられ，緯糸が通され棧の役をしている。Cのカマカップの操作と交互に行うことにより織物が織られるわけで，織物の働きはCの「カマカップ」とDの「ペカウンニ」によってなされるわけである。つり糸は昔は織り糸によりをかけて丈夫なものを使用したり，「いらくさ」の繊維によりをかけて使用した説もある。後には日本の「たこ糸」風の丈夫な，よりの強い木綿糸を使用している。その形もいろいろある。

（イ）　二重に曲った柳棒

（ロ）　わく様のもの，両側が革紐でとめてある。

（ハ）　竹をくりぬいたもの，又は「また木」

E　アッシペラ (attush-pera)

図13非常に巾の広い刃の部分のある木のへらである。操作の際低い方の糸をおさえつけて，上下の糸の間かくをつくり，よこ糸の進みを便利にしたり，緯糸を打ちこむ役をする。両側及び

先端をうすく削り，経糸の間に入りやすい様にしてある。

材質…「いたや」が多い。

F　アフンカニ (ahunka-nit) **図14**

糸の入る木とのことで，緯糸をまく糸まきである。各種の形があるが何れにも彫刻が見られる。

G　ツマムンニ (tumam-ni) **図15**

腰のところの木という意である。織られた布をまきとる棒である。竹棒も使用されるが，先端にこまかな彫刻のあるのも見られる。

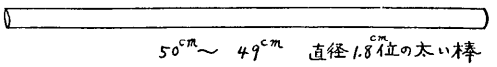

図15　ツマムンニ　(児玉作左衛門蔵)

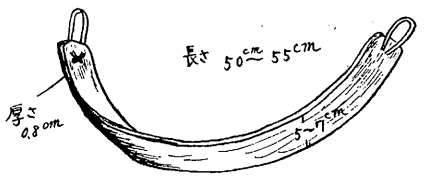

図16　イシトムシップ　(児玉作左衛門蔵)

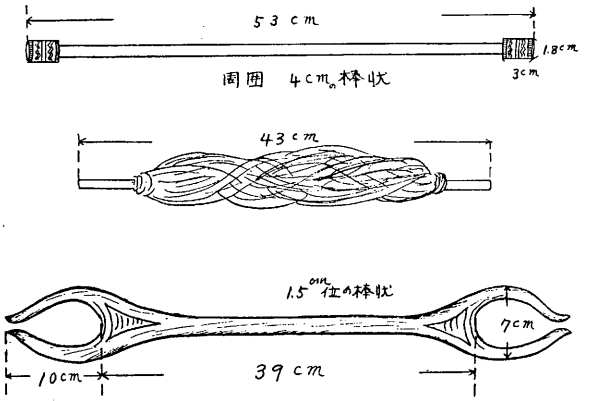

図14　アフンカニ　(児玉作左衛門蔵)

H　イシトムシップ (ishitomnsh-ni) **図16**

腰にまわす曲った木で「ツマムンニ」を固定させるために腹部にくくりつける。厚さ0.8 cm位巾5.7cm位の桑の板を湯の中に入れ，30分位ふかすと思いの形にまげることが出来る。この形のもどらぬ様に糸でしっかりとめておき，さめてから腰の寸法に合せて両端を切って丈夫な紐をつける。

結　　論

彼等民族特有の厚司が如何なる方法により製作されていたかということは非常に興味深いものである。内地との交易以前に彼等特有の服装としての厚司が自製材料として，動物の羽毛，皮革類，草衣等の次に使用されていたとすれば，その製作法は古い時代のものであり，この民族が彼等自身の力で前記のような構造の織機を創り出したのであろうかという点にも大きな疑問をいだいてくる。文献によると織機の由来については前にも記したように次の三つの事項を見出している。(一)内地の織機の形式が彼等に残されたものかもしれない。(二)インドネシアのもので日本交流以前にアイヌ文化に影響があったのであろう。(三)太平洋諸島のものと特別な共通点があるということは理解出来ない。他の文明のかりものであろうとなかろうと環境の中にとけこんだ「持ち運びの出来る」という第二の特徴がある。日本古代の居座機と同様の形をもちながらその構成を異にして彼等特有のものであるとすれば，内地で使用されていたものがそのまま用いられているとは思えない。Ling Loth 氏はその著の中で，「彼等が寒い北方地方を放浪する内で創造とか，改良するという可能性は考えられない。又日本人からも何も得ていなかった。彼等の生活は非常に低く日本文明に密接に接触したアイヌ人は文明の中にありながら，かっての野蛮さを残している」と云っている。医学的な考察から見たアイヌ民族の有能説から考えれば，彼等なりの方法が見出されたのであろうとも思え，土地固有のものであり，接触によるものでないということも認められる。

先年渡道の際私共は北大児玉教授宅にてこの「アツシカルペ」を見ることが出来た。その後訪問した二風谷部落でも現在手工芸品に使用する「しなの木厚司」を織っているのを見せてもらい，こ

れが古くから彼等の間で行われていたものと，全く同じであることをたしかめ得られた。アイヌに関して長年の研鑽をつんで居られる教授はこの彼等特有の厚司織の技術のすたれるのをおしんで，部落の年寄の女子にこれをつがせ，一方夫人並に令嬢にもこれを操作させておられた。私共の研究の意を解され親しくこれを伝受して下さった。操作の方法は次回に記したいと思う。

終りにのぞみ本研究調査に対し御指導御協力下さった，北大児玉作左衛門先生御一家，東大鈴木尚先生，渡辺仁先生，北学芸大故河野広造先生，道立図書館更科源蔵先生，道立各博物館長先生，，北海道新聞社渡辺，辻山，葛西の諸氏，本学被服科長宮下孝雄先生，その他御協力いただいたアイヌ古老の方々に心から感謝いたしたく存じます。

（本研究の一部は昭和35年10月16日　日本家政学総会に於に発表した）

文　　献

- 杉山寿栄男著：　日本原始繊維工芸史　土俗篇　原始篇
- 金田一京助・杉山寿栄男著：　アイヌ芸術
- 鷹部屋福平著：　北方文化研究報告　アイヌ服装紋様の研究
- 名取武光著：　ドルメン第三巻・第四巻　アイヌ土俗品解説（二）
- 喜田貞吉著：　ドルメン第四巻　アイヌは南方系か北方系か
- 金田一京助著：　ドルメン第一巻　アイヌのハヨクペ，アイヌの鯨
- 渡辺　仁著：　民族学研究第16巻　沙流アイヌに於ける天然資源の利用
- 伊勢秦檍丸撰・常陸間宮倫宗増補：　蝦夷生計図説
- 民族工芸研究会：　北海道原始文化聚英
- 河野広造著：　蝦夷往来第3号　アイヌ織物染色法
- 知里真志保著：　分類アイヌ語辞典　植物篇
- 更科源蔵著：　北方文化シリーズⅠ
- 河野広道著：　〃　　Ⅱ　Ⅳ
- 高倉新一郎著：　北辺開拓アイヌ
- 英国王立人類学会保管：　Dr Manro 手記（渡辺　仁複写による）
- Ling Loth：　Studies in primitive looms
- Rev John　Batchelor：　The rerigion superstitions and general history of the hairy aborigines of Japan. The Ainu of Japan
- Dr John Batchelor：　Ainu life and lore.
- Gerge Montandon：　La Civlisation Ainou et les cultures arctioues.
- R. Torii：　Etudes Archéolgiques et Ethnologiques. Les Ainou des iles kouriles.